特別寄稿

初期のIATSSの事業に参加しての二、三の思い出

中村英夫
Hideo NAKAMURA

IATSSの創立以来、この40年の間に私はその事業にさまざまな形で参画させていただいた。そこでは多くの友人と出会い、またさまざまなことを学んだ。その全部についてはとても書ききれないが、そこで知遇を得た多くの先輩、友人が逝くなったいま、せめて自分が比較的深くかかわった事業についてだけでも、ここに述べておくことにする。

IATSSの会員になった頃

1970年はわが国の交通事故死者数が16,765人と最悪となった年であり、国を挙げてその減少に必死になった時期であった。この頃、東京大学生産技術研究所で交通工学の研究に携わっていたIATSS会員の故越正毅助教授は内閣府の交通安全対策室から交通安全対策の立案への協力を要請されていた。当時、東京工業大学の社会工学科に在籍し、各種の社会政策のシステム分析を進めていた私は、故越助教授から調査分析を手伝って欲しいと要請された。そうして越先生のグループと私の研究室スタッフが一緒になって、各種の交通安全対策の効果をモデル分析して評価するという研究を始めた。ここで取り上げた対策は、安全教育の拡充や飲酒運転の罰則強化のような対策から、車輛の安全性強化、さらには歩道橋など交通安全施設の増設など、実に多方面にわたるものであった。この計量的な分析評価は、少々無謀にも思えたが、当時盛んに用いられたシステムダイナミックスのような分析的手法で解析し報告書を仕上げた。そこでは交通安全対策の成果の10年後の実現可能目標として、交通事故死者数の半減を掲げた。どのような経緯があったかは十分記憶していないが、ともかく、この目標は公的に採用された。その後、多方面の関係者の努力でこの目標は1980年には成就され、世界からも注目されることとなった。もっともこの値はその後再び増加を示し、大幅な減少に再び成功するのは1994年になってからである。昨今の年間死者数が4,000人台という数字を聞くにつけ、隔世の感がする。

IATSSが設立されたのは1974年で故越助教授はIATSSの初代の有力メンバーであった。副会長の八十島義之助先生や越先生の推薦もあって私も会員の一人にしていただいたのはその後まもなくであった。

その頃のIATSSでは漫画家の故岡部冬彦さん、新聞記者の故岡並木さん、精神科医の故斎藤茂太さんといった全く異分野の比較的年配の会員と、社会学、心理学、経済学、工学、農学等の多様な専門の大学の助教授クラスの若い会員が集まり、熱気にあふれた議論を夜の更けるのも忘れて行っていた。その当時は稀であった全く異分野の人々の集まりに参加しているという会員の意識と自由な雰囲気がそれを可能としたのであろう。事務局のメンバーも事務局長の鈴木辰雄さんをはじめとして賑やかな意見の持ち主が多く、そのような中から斬新な調査研究が生まれ、さらに具体的な対策が新たに提言されることにもなった。例えば、東京銀座の数寄屋橋交差点の5年に及ぶ実態調査の研究は世界一のコンパクトなスクランブル交差点の実現に繋がった。

国際共同研究「自動車の将来」

1970年代末になると日本の自動車の海外への輸出は増加し、とくに米国への急激な増加は、米国との間にいわゆる自動車摩擦を惹き起こした。1973年の

第１次石油危機、さらには1970年に制定されたマスキー法と呼ばれる自動車の排気ガスへの厳しい規制に対して、日本の自動車メーカーは、ホンダのCVCCエンジンの開発をはじめ、優れた排気ガス対策を実現し、米国市場へも大きな影響を及ぼした。一方ではこれに対しての米国での反発が大きな政治問題化していった。このような時、米国のMIT（マサチュセッツ工科大学）の数名の学者が中心になって進めようとしたのが、自動車のもたらす多面的な問題についての国際共同研究であった。

MITは世界の主要な自動車生産国７カ国の研究者によって国際共同研究を行おうとし、日本では東京大学にこの共同研究の拠点となることを期待した。当時IATSS会長であった故八十島先生などを通じてこの研究の日本チームのまとめを託された私は、交通経済学の故岡野行秀教授（IATSS会員）、国際政治学の故佐藤誠三郎教授、自動車工学の井口雅一教授（IATSS会員）、交通工学の故越正毅教授（IATSS会員）とともに自動車にかかわる生産、経営、貿易、技術開発、環境影響等の広汎な範囲にわたる諸問題についてのわが国の状況を研究調査する活動に関わることとなった。主要メンバー５人のうち４人までがIATSSの会員であったこともあり、この研究への協力、支援をIATSSに依頼した。当時、IATSSの副会長でもあった故杉浦英男氏（元本田技研工業(株)会長）や鈴木辰雄IATSS事務局長らの尽力もあって、社団法人日本自動車工業会からこの研究への財政的な支援や資料の収集等に大きな協力を得た。

研究はアメリカのMITをはじめイギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン、イタリア、日本のそれぞれの国の大学等の研究者により、実情調査をもとに進められた。

日本チームには主要メンバーの下に、大学研究者、省庁担当官、メディア等広範な分野の専門家が参加し、多くの会合を繰り返しながら研究調査は精力的に進められた。各国の研究成果は、米国、スウェーデン、日本で開かれた国際会議の場で議論を深めた。中でも自動車の貿易問題は、時の国際政治上の主要課題であり、日米間の対立も厳しく、激しい討議が何度もなされた。特に米国の自動車関係者の中には、日本の自動車産業は公的な優遇措置や労働者への過重労働の強制など、国際競争上の不公平な状況にあるとの見方が強く、それに対処するためにも輸入上の障壁を強めるべきであるとの意見が横行していた。しかし、日本チームの調査はそのような不公平な状況が存在することを明確に否定するものであった。

４年間の研究成果は、MITのアルシュラー教授とルース教授の編集のもと『Future of Automobile』として出版され、日本では『自動車の将来』という書名で翻訳出版された。この中では、日本の自動車生産の技術水準は高く、商慣行や労働条件も他の国々と比べて特殊なものでないこと、そして自動車輸出による相手国への影響を減らすには現地での直接投資が重要であり、それによる雇用確保などを図るべきであることなどが示された。当時、日本の自動車メーカーの現地生産は、米国では始められたばかりであったが、世界各国で盛んになった昨今の現地生産を見るとき、この四半世紀の間の変化には、感慨を覚えるのである。また、この研究の当時、自動車生産は先に挙げた７カ国が主であり、韓国でさえ全く考慮されていなかったこと、あるいは技術や利用面でもナビゲーションシステムやハイブリット車、クリーンなディーゼル車、水素エネルギー車の登場なども予測されていなかったことも付言しておくべきであろう。

ともかくこの研究の成果は、日本の自動車の生産や貿易が何か特殊であるとの米国などでの偏見をなくすには大きな成果を挙げたと言える。この困難な国際共同研究の実施に際して、IATSSの存在の果たした役割は、極めて大きかったことを述べておきたい。

作行会と本田宗一郎さん

私は、大学の助手時代「作行会」という公益法人から若い研究者の助成を目的とする奨学金を頂いていた。しかし、この団体がどのような団体かも知らなかったが、当時の東京大学生産技術研究所に奨学生の募集が来ていたので応募したのである。私の専門は土木工学に属するものであったが、この分野では募集されていなかったので、応用数学という分野で私の研究課題をまとめて応募し、あわよく採用となった。当時の大学助手の給料は至って少なく月給２万円たらずであったが、この作行会の奨学金は工学関係の若手研究者に３年間にわたり月１万５千円、しかも、その使い途を限定しないという大変魅力的なものであった、しばらくして私はドイツの大学へ長期間留学することになった。妻と２人の息子も一緒に連れて行きたいと願っていたが、その旅費の工面ができなかった。ヨーロッパ行きは、ようやくア

ラスカ経由の便が飛びはじめた頃で、航空運賃といえば、自分の給料に比べて余りにも高額であった。そこで、断られても仕方がないと思いながら作行会の事務局におずおずと電話し、奨学金の前借りをさせてもらえないかと尋ねた。その答えは思いもかけず「結構ですよ。すぐ事務局へ来てください」というものであった。そうしてその後の2年分の奨学金の前払いを頂き、家族の航空賃にあてたのであった。このような気前のよい奨学金を出す団体は誰が作ったのであろうかと思いながら、家族を連れてドイツへ旅立つことができた。1968年のことである。

その後20年程経った1990年、当時のIATSS事務局の鈴木辰雄さんから「作行会は本田宗一郎さんと藤沢武夫さんの二人ではじめられた事業であること、創立者の名前はこの会が解散するまでは公表しないこと、この会はその役割がほぼ果たせたので、その運営は閉じる」ということを聞いた。

そこで鈴木さんと相談して、かつて奨学金を受け取った、IATSS会員の5人が発起人となり、感謝の会を開催することにした。

そして奨学金を受け取った人たちすべてに、奨学金の使い道を書いていただき、それをまとめて文集を作り、これを感謝の会「作行会ありがとう」で、私たちのささやかな御礼の気持ちとしてお二人にお渡しすることにした。当日は、本田さん、藤沢さん、そして理事長をはじめとする作行会の方々にも出席していただき盛大な会を開くことができた。

この会を開くに当たって名簿の作成から当日の会合まですべてをIATSSの事務局に全面的にお世話になった。IATSSがなければ事務能力のない私たちだけでは文集も作れなければ会も開けなかったと思っている。

IATSSの国際シンポジウムの会合などの際は、本田宗一郎さんは、必ず参加して下さった。いつもニコニコとして交通安全の進歩のために尽力をしてくださいと私たちに丁寧にお願いをされ、学会の活動に「ありがとう」と頭を下げられるのであった。

こうして、自動車を社会に広めた本田さんの安全な交通社会の実現へ期待される強い思いをIATSS会員たちは強く感ずるのであった。IATSSは創立40年、その間、多岐にわたる活動をしてきたし、そこでの成果も少なくない。しかし全世界にはまだ年間124万人（WHO調べ）もの交通事故の犠牲者が出ている。わが国はもちろん、全世界の交通安全のために、本田宗一郎さんたちの遺志を果たすべく、IATSSが今後ともなすべき仕事を一つ一つ積み重ねて行かれることを切に願っている。

（東京都市大学名誉総長・東京大学名誉教授）